

嵯峨二尊院の宗祖廟の研究

故

伊藤祐晃

序

現今諸人が二尊院の大師廟を認定し參詣しつゝ、ある廟塔は、大師の本廟にあらずして湛空公の行業碑なるを古人既之を看破せり。

本朝高僧傳曰(作者師蠻序(元祿十五年))

支那僧傳不有_ニ師資同_ニ諱_ニ云々本朝敎家犯_ニ師諱_ニ云々

余嘗聞_ニ二尊院有_ニ法然碑_ニ一日率_レ徒往而讀_レ之此湛空碑也、題_ニ其碑額_ニ曰空公行狀世人見_ニ此題字_ニ誤以爲_ニ源空碑_ニ此其爲_レ害之徵也、然沿尙之風今也無_レ可_ニ如何_ニ云々

又西澤一鳳(浪華の書肆にして、通稱正本屋利助)云ふ、狂言綺語堂。李叟はその別號、享和二年生れ嘉永五年卒)も此の墓碑に關して言あり。

空公行狀碑

嵯峨二尊院に空公行狀の碑あり今其碑前に圓光大師御廟前記せし石燈籠左右に二基を建たれば全く法然上人の塔となれり然るを先年ある人ひそかに此石を紙に摺字せるを見しにいかにもおほろけなれき湛の字にて源にはあらず、湛空は此寺を作りて後やがて師源空を請じて開山すれば此塔湛空なるべきこと明らかし何者かかく文字を書損ぜし

め強て法然上人の塔せせるや凡尊貴又徳者の墓を謬り傳ふる愚昧の土人の話は論にたらず爰に師弟の碑を紛らはすは點智の浮圖氏の所爲にして誠ににくむべし古佛寺の縁起なきも甚だあやぶむべきもの多し其趣意人に信ぜしめんごしてかへりて嘲りをまねくもの歎くべし。ご

(新群書類從第一演劇西澤文庫皇都午睡二編中の卷六百二十三頁)

上に空公行狀あるを以て以前より源空公に誤り傳へ來れり。余も此の碑文が既に摩滅蝕文して實物に就いて讀破する能はざるものご斷念し之を調査せざりしが、好機を得て之を摺本として研究するに全く洪空公の碑文にして、我宗祖のものにあらざることを明瞭にせり。

果して然らば元祖の廟は何處に存在せるや。興味深きごは耽空の四卷傳によりて洪空、源空の墓碑を後世に確定し得るごごなり。今ご、に此の事實を叙せんごす。

二尊院の起源は諸書を涉獵するも未だ其の起源を明かにするを得ず。仍て茲に其の推定説を掲げて後勳を俟つのみ。現在二尊院の位置は恐く宇都宮彌三郎賴綱入道蓮生の山莊の址ならんか。而して宗祖は蓮生の請によりて此地に來往せられしならんか。蓮生法師末年捨て、之を寺ごなし、宗祖を請して開山第一祖ご爲し圓頓戒の系脈に基き信空を二世ごし洪空を三世ご爲したるは恐く蓮生洪空の本願より發せしならん。後宗祖を中興開山ご稱するに至れるは天台宗側より名けたるものならんか。

扱先づ注意し居くべきは宇都宮彌三郎賴綱(入道蓮生)ご定家、爲家の關係なり。

明月記嘉禎元年五月廿七日條下に

天晴 殿下自二昨日二五、日善惠房戒云々

予本自_ラ不知_下書_ニ文字_ニ事_上嵯峨中院ノ障子色紙形故予可_レ書由彼人道懇切雖_ニ極見昔事_一愁_ニ染_レ筆送_レ之_一古來人歌各一首自_ニ天智天皇_ニ以來及_ニ家隆雅經_ニ、入_レ夜金吾示送_一」

之れ所謂定家卿の小倉山莊色紙にして世に推賞して推かざるものなり、古來百人一首は定家の撰にして定家自らの山莊に書きしものミ、世人皆斯く信ぜしが、今此定家の日記によりて考ふるに百人一首の撰者は彼の入道即ち宇都宮蓮生にして蓮生の女定家に嫁すれば、定家は其舅の懇望に任せて蓮生の山莊に書かれしもの、如し。

、この蓮生の山莊こそ中院なること此日記に依て知らる。且四卷傳に嘉祿三年山徒が大谷靈廟破却の砌にも之を守護して西山に尊骸を送りしものは宇都宮彌三郎入道蓮生なりしことを思ひ合すべきなり。即ち

四卷傳(十七ノ八〇)曰く

第五十八山徒擊退の圖

件夜改葬、宇都宮の入道守護のため、遁世の身也云こも、いてにし家の古人をまねきて、俄の事なれば、五六百騎の兵士をもよほして、宿直すこて、哀哉、昔は死生不知の譽をほこさんと思ひしかこも、今は往生極樂の名をこ、めんこ願す云々

第五十九 墳塋發掘の圖

倩往來を思は、祖父金吾朝綱朝臣、東大寺の協士觀世菩薩造立したてまつりて、かたみを東海に留め孫子沙門賴綱法師は、西方界の教主阿彌陀如來に逸歸して、たましぬを、西刹にまかす、祖孫ちきりふかく、前後たのみあり、しかうして漸く洛中をこほらせ給ふに、面に涙をながし、各々袖をしほる、云々(此文九卷傳、并十卷傳共に引用す)

中院ミは古愛宕山白雲寺の末院なり。(山州名跡志第八二〇二によれば山上を上院ミ云ひ此所を中院ミ云ひ、下院は今の大佛殿の邊に在し云ふ)定家の山莊并に時雨亭は今日處々に傳説地あれども、實は今の厭離庵の地か、又は寂光寺

の地か定かならず、定家の嗣子爲家卿も此地に住せり、よつて中院大納言と稱せらる。

現在二尊院の地は、古へ棲霞寺の境内の一部にして湛空晩年の命名ならん。著聞集に

湛空嵯峨二尊院にて涅槃會行はれける時

きざらきの中の五日の夜半の月

西音法師

入にし跡の闇ぞかなしき

にて知らる。然れども少くも四卷傳を著作せしき迄には、曾て二尊院の名ある事なし。

四卷傳(十七ノ八二)曰く

第六十二小倉山雁塔の圖

弟子前權律師公全此聖骨爲奉納敬建立寶塔一基、同念佛三昧を勤修奉納阿波院之御骨、これ少藏山のふもこ中院のほこり大乘善根の塚也。

公全此文によりて大師の靈骨を恐れ多くも土御門天皇の御骨にも念佛三昧を修して同處に納め奉られしことを知るに足る。此れ偏に正信房湛空の苦心の存する所にして、若し宗祖のみの御塔とすれば大谷と同じく山徒等に破却せらるを恐れ、天皇御生前に於て湛空圓頓戒の師範たるの因縁を以て阿波國に崩御ありし陛下の聖骨と同處に之を奉葬すれば、如何に暴戾無極の山徒も彼此何れもも判定せず、恐く破却し能はざるべし。この深謀遠慮敬服すべし。又此の二尊院に二祖鎮西聖光上人の御骨をも奉納しあるの記録あり。即ち

糺鈔卷四全書第三頁曰く

上人滅後依遺言御骨二尊院ノ故上人ノ御舍利中ニ可奉納之由遺弟持願房專阿彌陀佛等嵯峨正信上人ニ申許奉
籠竟其次調毘沙門堂法印云聖光房臨終何候イカニ答曰目出度ト委語申リ法印之道心深ク御座シハク化他ケリ爲先ルハト承シカハ

安豐能^ノ宇覺^ル候^シ。往生^ノ候^シ貴^キ事也。

此文によれば、二尊院には元祖、二祖の御塔ありて、本宗に採りて至極重大なる靈域なるに其所在果して何れぞや。之れ余の研鑽し其の位置を明かにせんことを欲する所以なり。

先づ二尊院に於ける大師の靈塔は前掲四卷傳の記事の如く必ず雁塔ならざるべからず。勅傳第四十二に

正信房の沙汰しては彼芳骨を納め奉らんが爲二尊院の西の岸の上に、雁塔をたて、貞永二年正月廿五日に正信房

御骨の御迎へして粟生野の幸阿彌陀佛のもきに罷り向ふ(十六六)
(六〇五)

とある如く何れも二尊院大師廟は雁塔にあらざれば不可なり。然るに現在の行狀碑は決して雁塔にあらざして位碑形なり。之れ大師の塔にあらざる理由の第一なり。

雁塔とは讀んで字の如く雁が空中を飛翔する如き形狀より支那文士間に於て名けられし異名なるべし。今雁塔と名づけし典據を擧ぐれば、

康熙字典塔の解に曰く

唐太宗貞觀三年長安宮城南建大慈恩寺造顯浮圖藏釋立裝所取西域佛經名雁塔

梵本謂之塔者昔有伽藍依小乘食淨食者雁、犢、鹿也。一日見雁飛衆僧開供摩訶薩埵宣知梵言好施也一雁應聲而墮衆曰此雁垂戒宜旌彼德建塔癡雁、雁塔之名依之後遂爲故事

後魏常山七級碑梵言僧婆華言雁、梵言宰塔波華言塔也

字彙に

又浮圖也唐長安有慈恩寺塔一名雁塔

以上雁塔の文字あるも唐鑑字典の説既に非なるを覺ゆ。何となれば貞觀三年八月立裝三藏始めて渡天の途に上り(一説

に元年云ふ)同十九年長安に歸れり。然るを貞觀三年玄奘取所の西域佛經を藏む云ふ其錯誤知るべきなり。然れども雁塔の名長安慈恩寺の塔に起因するこ略々推知するに難からず。案するに雁塔はも龍塔にはあらざりしか、龍と雁其の普通するを以て中國の文士龍字を避けて風流なる雁字に更へしものにあらざるやと思ふ。其形狀より遂に層を爲すものを雁塔と名づくるに至りしに非ざるなきや。塔は元と印度以來舍利を納むるを以て本義とする點なきより考ふるも雁塔よりも龍塔の方其意味適切なるを覺ゆ。文字を弄するに巧なる支那に於て何時の頃か龍は雁と變化し遂に雁塔と稱するに至りたるにはあらざるか。

我朝に於ても往古より彼國の文章に倣ひ、三五層より乃至十三重の如き幾層屋を重ねしものに對して雁塔の名を付せしもの、如し。例せば、教王護國寺の記録なる東寶記第二續々群第十二ノ三十六頁に大江匡房卿之草せる應德塔供養御願文に

去天喜三年八月廿三日雷火忽震、雁塔爲灰、似下昇九宵而不歸

とあるか如く幾層屋根を重ねる東寺の塔の如きものを形容したるものなるこ明瞭なり。然るに四卷傳の繪圖にあるは雁塔にあらずして多寶塔なり。これ圖者の臆想より出でし誤謬なりと知るべし。

(十卷傳には此繪圖に基きてか、公全律師於小藏山麓二尊院上建立多寶塔、並土御門院御墓所奉納上人御骨云々)

余曩日二尊院に到り大師廟並に二祖上人塔を探查す。維新以來同院院代を勤むる七十許歳の某僧に就いて阿波院の御塔を問ひぬ。老僧地圖を按じ余を嚮導して所謂大師廟なる湛空公行碑を北へ距る凡三十歩の地に到り東面起立せる三基の古墳を指示して曰く、右(北)嵯峨天皇、中央土御門天皇、左(南)後嵯峨天皇の御塔ありと説明す。附言して云く然れども之れ唯寺傳口碑のみにして何等の記録あることなしと云へり。

抑も嵯峨帝の御尊骸は大覺寺の西北なる所謂嵯峨北山之陵に奉葬せられしものにして此地に埋骨或は御塔のある謂れ

なきは勿論なり。

次に土御門院は承久の亂に同三年土佐國に奉遷、以て阿波國に遷られ遂に寛喜三年十月十一日崩御あそばさる故に阿波院と號す。火葬の後御骨を京師に送り西山の金原法華堂に藏む。金原は今の乙訓郡奥海印寺村南七八町許りにありて母公承明門院御遺詔に基き御骨奉安の爲め建立せらる所なり。

湛空は此帝に於て生前圓頓戒の師範たる因縁あるを以て恐くは御分骨のこゝありしならん。四卷傳の「同じく念佛三昧を勤修して阿波院の御骨を納め奉る」の記事に依れば此中央の碑は寺傳の如く土御門院の御塔に相違あるまじ。

次に左方の後嵯峨院と稱し奉る御塔は、始め天龍寺の地にありし淨金剛院に葬り奉りしが、尊氏後醍醐帝御追福の爲め夢應國師を請して天龍寺創建の際淨金剛院を二尊院境内に移轉せしものなり。而して御骨のみ天龍寺方丈の北へ移御せしこゝ左記の文にて知るこゝを得。

山城名勝志卷九ノ四百六十七に甘露寺權大納言親長卿記を引いて曰く

文永九年二月十七日後嵯峨院崩御、奉茶毘ニ納銀壺ニ入白絹袋ニ、中納言經任奉掛頭渡淨金剛院、
大日本史曰く

土御門帝第七子後嵯峨院奉安御骨於淨金剛院二十年六月移藏御骨法華堂天龍寺方丈之北

淨金剛院は一時二尊院境内にありしが何時の頃にか廢寺となりたるものなり。玉葉集の

淨金剛院にて讀ませ給ひける

いくささるあらしにつけて聞つらん

後嵯峨院

我すむ寺の入相のかね

文永九年二月龜山別院に崩ぜらる、これ湛空示寂後正に二十年の後にして、彼の夢應國師疎石が

